



TITLE:

<書評>三木聰著「明清福建農村社會の研究」

AUTHOR(S):

太田, 出

CITATION:

太田, 出. <書評>三木聰著「明清福建農村社會の研究」. 東洋史研究
2003, 62(2): 337-346

ISSUE DATE:

2003-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155515>

RIGHT:

三木 聰著

明清福建農村社會の研究

太田 出

本書は、三木氏（以下、著者と略す）が二〇〇〇年八月に北海道大學に提出した學位請求論文「抗租の研究——十六・十八世紀の福建を中心とする社會經濟史的・法文化史的考察——」を基礎とする、五〇〇頁以上にも及ぶ大著である。近年の明清時代史研究では、問題關心の多様化、研究分野の細分化が顯著に進行し、かつて隆盛を極めた民衆闘争研究が沈滞傾向に在ることは周知のとおりであるが、かかる學界動向に在って抗租を直接の考察対象とする本書の上梓の意義は頗る大きい。著者は森正夫氏が提起された「國家權力と抗租する佃戸との關連の問題」を自覺的に取り上げる等、従來の抗租研究を發展的に繼承し空白部分を埋めようとすると同時に、これまで江南を中心に構築されてきた抗租像を相對化すべく、福建省の抗租像を多數の未發掘史料とともに提示する。本書を通讀して我々が痛感させられるのは、抗租研究が必ずしも極限まで突き詰められていなかったこと、ひいては民衆闘争研究が今なお検討の餘地を残したまま放置されていることであり、かかる點で本書は現在の學界動向に一石を投ずるものといつても過言ではないのである。

本書は全四部十一章一附篇から構成される。第一部では福建省で展開された抗租とその社會經濟的な背景、第二部では抗租と明清國家權力、第三部では抗租と禁壓裝置としての保甲制、第四部では抗租と方法としての圖賴をそれぞれ扱っている。では、まず本書の内容を順に整理・紹介していくことにしよう。

序では、明清社會經濟史研究が一九八〇年代に晝期を迎えたことを前提に、抗租研究を二期に分かつて整理する。八〇年以前は發展段階論の影響を強く受け、明清時代の歴史性を究明しようとする學界動向の下、抗租自體が地主―佃戸關係の發展段階を規定するメルクマールと看做され、その發展的諸側面の追求がなされた（重田徳・小山正明・田中正俊・森正夫・濱島敦俊）。八〇年代に至ると、森氏の「社會を構成する基本的な場、人間が生きる場としての地域社會と抗租との關連の問題」を考察すべきとの問題提起を受けて、抗租を地域の秩序の問題として捉え直し、傳統中國の持續的な秩序形成の論理の中で再検討していこうとする研究の新たな方向性が示されたという（森正夫・岸本美緒・寺田浩明）。著者は後者の方法を具體的に實踐すべく、福建省を地域的對象として「明清時代の抗租をめぐる具體的な歴史像を構築しよう」と試み「ることを告白する。

第一部・第一章「明末以降の福建における抗租の展開」主に地方志を用いながら明末萬曆年間から清代後期の道光年間に至るまでの福建省各地の抗租狀況がクロニクルに検討される。この二五〇年に及ぶ長期間に互って、福建省では全域で日常的抗租が持續的に展開されていたことが實證的に明らかにされ、また抗租と一田兩主制、商業資本・商品流通、國家權力との關係が問われね

ばならぬことが提起される。

第二章「雍正年間の崇安縣における抗租の展開」 著者が福建省圖書館で發掘した雍正「崇安縣志」卷一、風俗の記載に依據しつつ、第一章で提起した諸問題を具體的に分析する。田皮・田骨慣行の社會的確立によつて「主家不知田之所在」という事態が現出し、それに依據した意識的な「抗租霸耕」が行われていたこと、福建省内部の米穀流通市場の存在を前提に商業・高利貸資本による小農民（佃戸）を對象とした問屋制前貸の生産形態が行われており、かかる状況と密接に關連して抗租が展開されていたこと、雍正年間の崇安縣ではすでに地方官と在地の治安機構とが一體化した抗租禁壓・取締システムが形成されていたと推定されることを指摘する。

第三章「抗租と阻米——明末清初期の福建を中心として——」

明末清初期の福建省で佃戸の地主に對する抗租が廣汎に展開していたことの社會經濟的な背景として「商品作物の栽培を中心とする商品生産の展開、米穀の生産・流通構造の特異性、地主の城居化の進展および佃戸の商品生産にともなう地主―佃戸關係の變質、農村社會への商業・高利貸資本の浸透および彼らと小農民（佃戸）との間の經濟的な支配・隷屬關係の成立、さらには（地主的市場）としての米穀流通市場を前提とした地主・商業資本による米穀の（他境）への搬出と（本境）における米穀不足」（一〇六頁）等々の事態が存在したことを明らかにする。また抗租闘争が阻米闘争（有利な市場への米穀の搬出を抗租という手段で阻止する）としての一面を有していたと述べる。

第四章「沙縣——清代福建の一方社社會——」 抗租を生み出

す社會的經濟的諸條件を延平府沙縣というミクロな視角から検討する。産米地區に屬する沙縣は餘剩米穀を移出していたが、閩江を媒介として省都福州に繋がる福建省最大の流通市場圏に包攝されていたため、地主と商業資本との結託による米穀の買い占めが行われ、そこでは地主を所有主體とする水碓・船碓・精米施設が重要な環節となっていた。また福州の商業資本と沙縣のそれとの間のネットワークによつて買い占めに拍車がかかり、半ば強制的に米穀が福州へ搬出されていたことを豊富な史料とともに描出する。

第二部・第五章「清代前期福建の抗租と國家權力」 泉州府同安縣積善里の黃氏が所有する平和縣の屯田で展開された抗租を事例に、清代前期（雍正年間）における地主―佃戸關係と國家權力との關係を考察し、第一に、當該時期に國家權力がすでに地方官から在地の治安機構（保甲制）へと連なる形態で抗租彈壓・缺租追比システムを完整させており、地主の佃租收奪を直接的に保證するなど、私的な經濟關係たる地主―佃戸關係に介入していたこと、第二に、〈賦は租より出づ〉という觀念が宋代ではなく、明末以降の抗租の展開、それに伴う地主―佃戸關係への國家權力の直接介入という事態の中から成立してきたことを指摘する。

第六章「抗租と法・裁判——雍正五年の〈抗租禁止條例〉をめぐって——」 内容的には①紳衿の佃戸に對する私的刑罰行使の禁止②佃戸の抗租の禁止を骨格とする雍正五年〈抗租禁止條例〉について、當該條例の制定過程・條文内容、成立の背景にある現實、抗租の禁壓・取締における實質性等の諸問題を取り上げ、以下のような結論を示す。①制定過程から見れば、②が立法の必要

性を主張されていたのに對して、⑥は法のバランスを付與すべく立法の過程で出現したこと、②條文内容では③は字義どおり紳衿地主を對象としたものであり、庶民地主の場合には「威力制縛人律」で處罰さるべきものであったこと、③現實的には「抗租禁止條例」の制定を俟つまでもなく、明末以來、抗租は國家權力の禁壓對象とされていたが、戸婚・田土の案・細事として扱われ、各地方官の自由裁量によって懲戒的處分・笞刑・杖刑・枷號が執行されていたこと、④しかしかような抗租の處理は「不應爲律」の適用における處罰と實質的な違いは存在せず、従つて「抗租禁止條例」制定の必要性は無かつたと看做しうること、等々。

第三部・第七章「明末の福建における保甲制の展開」 明末萬曆年間に福建省全域で實施された保甲制（郷約・保甲制）の性格が、〈郷紳的土地所有〉を展開する郷紳層を制度的基盤とし、同時に里甲制と比較して郷村社會内部への國家權力の介入を強化しようとするものであったと斷じ、明末の保甲制は國家權力・郷紳の一體化による郷村支配を志向した制度であつたと結論する。

第八章「長關・斗頭から郷保・約地・約練へ——福建山區における清朝郷村支配の確立過程——」 十七世紀半ばの明清鼎革期から十八世紀初の康熙後半に至るまでの福建省汀州府を中心に、國家權力の基層支配確立過程の復原を試みる。著者は當該山區郷村社會における秩序再編の一表象として、明末黃通の抗租反亂に直接的な淵源を有し耿精忠の亂などカオス的な状況の中で地域秩序・統合に関わる組織として生成してきた長關・斗頭組織の消滅と、明末以來の郷約・保甲・團練に由來する郷約・地保・約地・郷練・約練の定着という變動を提示し、そこに混亂から安定へと

いう地域の歴史的構圖を読み取るうとする。

附篇「明代里老人制の再檢討」 本篇は評者が贅言するまでもなく、後の中島樂章、寺田浩明・岩井茂樹、伊藤正彦ら諸氏に代表される里老人制研究、郷村裁判システム研究・論争の嚆矢となつた貴重な成果である（補論／四〇二—四〇五頁で整理される）。著者の主張はおもに①戸婚・田土の案等の第一番を里老人が擔當するという原則は、當初から空文化しており官の裁判に持ち込まれていたこと、②里老人に附與された刑罰權は國家の刑罰體系と質を異とし郷村の共同體的制裁を前提としたものであり、實際の裁判は調解を主とした柔らかなものであつたことの二點に存する。

第四部・第九章「抗租と圖賴——『點石齋畫報』『刁佃』の世界——」 人間の死或いは死骸を利用して他人を恐喝・誣告しようとする行爲は圖賴と抗租との關係を具體的事例を挙げつつ考察する。明末以降の華中南地域では抗租を行うにあたって圖賴という凄愴な行爲が廣く選擇されていたこと、圖賴案件では地主の佃戸に對する「威逼」の有無が厳しく問われたことなど、主に社會・法制面からの検討を行うと同時に、圖賴を選擇する佃戸の死生觀・他界觀など心性面からの検討の必要性を提起する。

第十章「輕生圖賴考——特に威逼との関連について——」 前章に比較して福建など各省の圖賴に関する史料を豊富に収集し總合的な検討を加える。その結果、圖賴が各地で高い頻度で發生し習俗化していたこと、州縣官が圖賴に對して誣告條ではなく威逼條を安易に適用し、圖賴の被害者から埋葬銀を追徴したため、下層民にとつて圖賴が社會的經濟的上位者に對する有効な報復・抵抗たりえたこと等が明らかとなつた。

第十一章「傳統中國における圖賴の構圖——明清時代の福建の事例について——」 傳統中國における圖賴の構圖を検討し、第一に、「圖賴を選択する前提には、自殺による死を平然と受け入れ、凄惨な圖賴さえも當然の行爲と看做すような、ある種の秩序意識が存在していた……圖賴そのものが人々の行爲規範の中に明確に定位されていた……こうした秩序意識・行爲規範の存在こそが福建の各地に圖賴を（風俗）として定着させ」たこと、第二に、圖賴を圖賴として裁かず、圖賴の被害者側から埋葬銀を追徴することと安易に事案の集結を圖ろうとする州縣官の對應に典型的に見られるような、實質的合理性を追求する傳統中國の法文化が圖賴の選擇に拍車をかけたこと、以上の二點を結論として提示する。結語は本書の總論部分にあたる。そこでは本書全體における分析・考察から導出された福建省の抗租像が整理・再確認され、これまで江南を中心に構築されてきた明末清初の抗租像に對置される。

以上、評者は一冊の書物という形であらためて著者の研究を讀みかえしてきたが、その中で著者が地方志・文集・判牘・檔案など多種多様な史料を、如何に精力的に収集し丹念に讀み込んだ上で立論してきたかに感嘆せずにはいらなかった。近年、歐米研究者の概念をやや安易に取り込み、かかる概念に類似した事態を傳統中國社會に「發現」しようとする研究がしばしば見られる中で（自戒の念も込めて）、史料を精緻に讀み込みそこから得られた生々しい手觸りに基づきつつ論理を構築・展開していこうとする著者の姿勢・手法は、極めて手堅くかつ説得力を有するものとして高く評價するに値しよう。

さて評者には當然に著者の網羅的な史料収集、緻密な分析實證によつて描出された福建省の抗租像に對して何らかの論評を加えることが求められるわけであるが、民衆闘争研究を専門とするわけでもなく、福建省を研究対象としているわけでもない評者にとつてそれは過大な任であるといわざるを得ない。従つて評者の問題關心に惹きつけながら若干の問題を提起するに止まること、豫めお断りしておきたい。

第一に、抗租と福建省という舞臺——一般的に宗族結合が強固であると看做される社會——との關係。まず本書を通讀して氣づくのは福建省など華南地域研究では必ず言及される宗族（郷族、以下、宗族と略す）が殆どといつてよいほど登場しないことである。評者が本書を讀み進める中で何となくしつくりこないと漠然と感じていたのはこの點であつた。本書の主な登場人物を整理すると、地主（郷紳・庶民に分かつ）、佃戸（A、B、C……）、國家權力（具體的には皇帝・中央官僚——總督・巡撫——知府・知縣・佐雜——保甲と下の行政・治安維持システム）となるが、これは著者が序で紹介した、江南を舞臺とする抗租像の登場人物とはほぼ同一であり、福建省を舞臺とする抗租像を描く場合にもそれで事足りるかに見えるのである。しかし一方で著者は確かに（「郷族」の嚴然と存在する福建の農村社會において、何ゆえ、明末以降に抗租が盛行し、それに對して國家權力の介入が必要とされたのであろうか）（第一章）と宗族をも含めた問題提起を行っている。つまり右の地主——佃戸關係を基軸とする登場人物のほかに、宗族内部、宗族間關係といったもう一つの軸をも加えることで、福建省の抗租像を構築するにあつて江南の抗租像とは異なる舞臺を

設定・明示すべきではなかったかと思われるのである。

たとえば第六章で検討された萬曆年間郷約・保甲制の場合を考えてみる。ここでは理念としての郷約・保甲制が現實に在地社會で實施される時、如何なる階層に依據していたかが考察されているが、許孚遠「條規」に見える約正の選考基準は「心術光明、行誼高潔」、保長のそれは「身家行止」、また黃承玄「事宜」の場合には各々「宜擇老成」「宜擇強壯」と記されるにすぎない。しかし著者は約正を郷紳・生監層に、保長を富裕な地主層に分析・比定した上で、郷約・保甲制が郷紳に依存し、郷紳側も自らの私的支配を揚棄しながら國家權力と一體化することで鄉村社會に對する一定の支配力を確保したと結論する。なるほど約正については「首推士夫、及於耆老、及於舉監生員」とあって、著者が郷紳・生監層に注目する理由も理解できるが、これとて「耆老」とある如く族長等の充當によつて宗族的な論理が持ち込まれた可能性を排除するものではなく、ましてや保長に關しては極めて曖昧な記載に止まっている。また郷紳・生監層を強調すれども、宗族の全てが必ずしもかような層を有するとは限らず、むしろそうでない宗族が多數を占める中で、郷約・保甲制の實施を考えようとするれば、宗族との關係が問われてしかるべきではなからうか。かりに著者の指摘の如く郷紳・生監層に依據していたとしても、そうした社會的經濟的階級關係を内包しつつ秩序づけられていた血縁的結合Ⅱ宗族（社會）と、國家權力の最末端に在つて地方行政を補完する機能を果たした郷約・保甲制とが如何なる關係にあつたかについては、評者ならずとも興味をかき立てられるところであらう。

同様の事は第四部で扱つた圖賴についてもいえる。たとえば族人間で租佃關係、それに基づく對立が存在した場合、はたして圖賴という凄惨な行爲が選擇される可能性は有つたのであろうか。或いは異姓間のみに限定されるのだろうか。福建省をめぐる圖賴の地域的擴がりを考える時、宗族と圖賴との關係の考察は不可缺であらう。因みに著者の掲げる史料を見るかぎり、宗族に關わると思われる記述は僅かに二點である。第一に『福建省例』卷三四「禁服毒草斃命圖賴」の「鄉隣族保、隨聲附和、坐觀成敗」（四五五頁）、第二に江西吉安府泰和縣の「族叔周星會」に對する圖賴の事例である。前者の場合「族保」の語それ自身が宗族と保甲制との密接な關係を推測せしめるものであるが、「族保」も附和雷同して圖賴を見逃していたというから、族人間でも圖賴が発生した可能性はある。また後者は「族叔」とあるから、親族關係としては決して近くはないが、宗族内部の圖賴であることには間違いない。もし宗族内部でも圖賴が発生したと假定すれば、なおかつ著者が第十章で検討した如く、圖賴が各地で習俗化していたならば、宗族内部で圖賴が起ることは該宗族にとつて極めて重大な（宗族社會内部の秩序構造において）、不名誉な（外部の他の宗族との關係において）事態であるから、族譜内の「族規」等にかかる行爲を禁ずる記載があつても不思議ではない（著者は族譜をあまり用いていない）。さらに宗族内部で矛盾・對立が惹起されれば、圖賴へと奔るのを恐れて何らかの方法で族内的な規制が働き、調停・和解へ向けての動きが見られたとしてもおかしくはない。そうした宗族内部の規制・懸命の努力を打ち破つてまで後者の事例のような圖賴が惹起されたとすれば、その圖賴

の背後にある社會構造が究明される必要がある。そしてそれが福建省に獨自のものであるか否かが次なる問題として設定されるべきなのではないだろうか。

第二に、抗租禁壓に關する法的整備と佃戸に對する刑罰。第二部・第六章で著者は〈抗租禁止條例〉制定後の各地における抗租禁壓の状況について検討を加えた中で、抗租が戸婚・田土の案細事として處理されたため、地方官が自由裁量で行いうる筈・杖・枷號の範圍内で恣意的な刑罰が執行されたことを述べ、さらに江西の事例を分析しながら「〈抗租禁止條例〉が地方レヴェルの抗租禁壓の面ではほとんど現實の意味をもっていなかったことを明示している……特に寧都州では事實上〈抗租禁止條例〉とは全く異なつた内容をもつ、地方獨自の抗租處理・佃戸處罰の規定を現出させていた」(二四八頁)と指摘する。しかしこうした地方獨自の規定——後述の如く現場で叢生する様々な附加刑——の存在をもつて、はたして當該條例に記された刑罰が現實的な意味を失つたというのであろうか。

たとえば著者のいう「地方獨自の抗租處理・佃戸處罰の規定」とは、抗租した年限が「二年・三年」の者は杖八十に枷號三十日、を、「三年以上」の者は杖一百に枷號四十日を加えるというものである。この規定では確かに年限によつて八十・一百という違いはあるものの、抗租を行った佃戸を杖刑相當と看做す點で大差ない。問題は杖刑に附加された枷號であるが、この枷號の性格をどのように考えるべきであらうか。殘念ながら評者も明確な回答を持ち合わせているわけではないが、杖數と枷號の日數との對應關係のみから推測するならば、刑律、賊盜、竊盜律、〈竊盜再犯條

例〉の記載に酷似している。今、薛允升『讀例存疑』から引用すれば以下のとおり。「竊盜再犯、計贓罪應杖六十者、加枷號二十日……杖八十者、加枷號三十日……杖一百者、加枷號四十日」。この條例は竊盜の初犯ではなく再犯を對象としたものであるが、江西の規定の場合も問題の箇所は二年(複數年)から始まつており、「抗租を繰り返し行つた者」を對象とする點で共通している(ただし竊盜再犯は盜品の價格、江西の規定は年數を基準に擬罪するという違いがある)。つまり〈竊盜再犯條例〉を念頭において制定された蓋然性は低くないといえよう。

そして薛允升は枷號に關して次のような按語を載せている。「謹按、此條分別杖數、逐層遞加枷號之處、事涉煩瑣、而于徒罪以上轉未議及、未免輕重失平。蓋擬以杖徒、仍係計贓治罪之法、而加擬枷號、正所以懲其再犯之罪。嚴于杖責、而寬于徒罪以上、似非例意(謹んで按ずるに、此の條〔例〕が杖數を分別し段階を逐つて枷號を加えるのは煩瑣な事であり、しかも徒罪以上には言及していないので、〔刑罰の〕輕重がバランスを失つてしまうのは免れない。蓋うに杖刑・徒刑への擬罪は、盜品の價格で處罰する法によるのであるが、枷號を加えるのは、まさにその再犯の罪〔の惡性〕を懲らしめようとするためである。杖刑より嚴しくし、徒罪以上より寛やかにするという〔杖・徒間の刑の段階を設ける〕のが〔本條〕例の意ではないようである」。薛允升によれば、枷號はたとえ罪が杖刑相當でも、本来ならば初犯で處罰された際に改心すべきところを懲りずに竊盜を繰り返したという再犯の惡性を憎み懲らしめるために附加されたものであつた。然りとすれば抗租の場合も何年も繰り返し滯納する佃戸の惡性を懲らしめる

ために枷號が加えられたと考えられる。つまり江西の規定は抗租を杖刑相當とする點で〈抗租禁止條例〉と同じであり、ただその悪性を如何に懲らしめるかという次元の問題を段階ごとに明記したにすぎないのである。

確かに薛允升自身も述べる如く、こうした枷號など（著者のいう立枷・木籠等も含む）附加刑の現場における叢生は、刑罰體系のバランスを喪失させるものである。著者の「現實的な意味を失った」との主張もかかる點に依據するのであろう。しかし〈抗租禁止條例〉・江西の規定がともに抗租を杖刑相當の罪とした點では國家の刑罰體系（死・流・徒・杖・笞の五刑）に沿ったものであり、そうした國家の刑罰體系とは異なつた次元で廣がっている附加刑が加えられているからといって、本來の〈抗租禁止條例〉が意味を失つてしまつた、ひいては制定の必要性が無かつたとは考えにくいのである。少なくとも抗租が白晝搶奪律で徒刑に擬せられるような大罪ではなく、杖刑相當の輕罪であることを明示した點で〈抗租禁止條例〉はその後の法の運用に一定程度の影響を與えたのではないだろうか。

また著者は『江蘇省例續編』の江蘇布政使應寶時的記事を用いながら、「當時「尋常缺租」という個々の佃戸による日常的な抗租・缺租……が一括りにされて枷號という刑罰を科せられ、或いは「圍圍」——非定制の牢獄Ⅱ羈舖・自新所・班館の類であろう——に拘禁されるということが、まさしく常態と化していたことを窺うことができよう」（二五七―二五九頁）と述べている。當該記事は妄りな枷號とともに收禁を禁じているのであるが、注意すべきは、枷號が附加刑、すなわち一種の刑罰であつたのに對し

て、收禁は刑罰——たとえば近代以降の懲役刑・自由刑の如き——ではなく、滯納した小作料を追徴するまでの佃戸の身柄拘束・確保であつた點である。従つて、まずは史料の記載に引きずられて枷號と收禁とを刑罰として同列に論ずることはできぬことを確認しておきたい。そこで次なる問題は、收禁の場所が圍圍Ⅱ羈舖・自新所・班館の類だつたのか、逆にいえば、布政使應寶時は明末以降脈々と續いてきた非定制の牢獄Ⅱ舖倉（羈舖・自新所・班館は名稱の變更にすぎない）への拘禁をここに至つて禁止しているのかという點である。

史料中には「收入圍圍」と見えるが、一般的に考えてこの圍圍が著者のいう羈舖・自新所・班館ではなく、定制の牢獄Ⅱ監と解釋した方が自然であることは言を俟つまい。それをなぜ敢えて羈舖等々と解釋する必要があるのか。たとえば『江蘇省例』臬政、「詞訟人證不准與盜賊同押」同治七年十一月十四日通飭に「有詞訟人證、與收捕盜賊各犯同押一處、略無分別者。……自後各州縣詞訟案内、情節較輕人證、應即酌量取保、不准濫行管押。遇有必須管押之犯、應專設官飯歇兩三家、承充發押（訴訟の被告・證人を、逮捕した盜賊と同じ場所〔監〕に拘禁し、殆ど區別しない場合がある。……今後、各州縣の訴訟案件の中で、情節が比較的輕い被告・證人については、即ちに酌量して保釋すべきであり、濫りに管押を准してはならない。遇ま必ず管押すべき被告が有れば、官飯歇兩三家を專設し、「そこに」請け負わせ管押すべきである）」とあるように、當時訴訟に關わつて最も關心を集めていた事の一つは、罪狀の輕い者を盜賊など凶惡犯とともに「監」に拘禁することであつた（タイトルに明確に表現されている）。なぜ

なら看役や牢頭の凌虐・勒索を受けるなど弊害が多發したからである。そこで右では「官飯歌」への拘禁が求められているが、名稱こそ「官飯歌」（官の經營する歌家）とあるものの、現實的にはかつての鋪倉に類する施設に他ならなかった。こうした「情節較輕人證」Ⅱ比較的輕い刑事案件や民事案件に關わる被告・干連の拘禁施設は光緒元年以後、「待質公所」に一本化されていくが、まさに官飯歌は待質公所への過渡的な名稱であつたといえよう。

かかる點からすれば、應質時は、抗租した佃戸が盜賊等とともに監に收禁されているという常態を憂い、むしろ官飯歌・待質公所等をはじめ所謂鋪倉に收禁すべきことを求めたと考えた方がよいと思われる。従つて、應質時の記事にいう圍圖をもつて押佃所の成立に至る過渡的狀況を示したものと理解できないのである。

やや煩雜な内容となつたが、推測をも含めつつ整理すると以下のようになる。まさに著者が實證した如く、雍正五年の〈抗租禁止條例〉制定以前より地主が佃戸の抗租を州縣衙門に告訴する事態が一般化していたのであるが、實際の對應は州縣官個々人によつて様々であり、等閑視する者、不應爲律を適用する者、時として白晝搶奪律に擬律する者すらあつた（著者の指摘の如く、一般的には不應爲律によつて杖刑に擬する場合が多かつたであろう）。かかる狀況の下で制定された條例中では、抗租は杖刑相當の罪と明記された。これは確かに法のバランスという側面がある一方で、抗租・缺租を處理する法的根據の缺如を補うべく、今後是不應爲律と同様に杖八十とする、かような原則を示すという側面もあつたのではなからうか（ただし嚴格に擬律されず、同じく杖刑として處罰する不應爲律、盜耕種官民田律などを安易に適用

する者もいたし、以前どおり等閑視する者もあつた。しかし個別の事例に固執してしまうとかえつて原則を見失つてしまう）。ところが、現場では一度のみならず繰り返し意識的な抗租・缺租を行う佃戸も存在した。そうした佃戸に對しては、その惡性を懲らしめるといふ、刑罰とは異なる次元において枷號が加えられた（あたかも窃盜の再犯を懲らすかの如く）、と。

以上、評者は偶目した史料に依據しながら卑見を示したが、〈抗租禁止條例〉の制定とその周邊との關係については今一度すつきりと整理する必要があるように思われる。

第三に、圖賴をめぐる心性。著者は第四部で死骸を用いた恐喝行爲Ⅱ圖賴について詳察し、圖賴が各地で頻繁に行われていたこと、しかもそこで見られる自殺・他殺が決して一時的な憤慨や羞恥心による突發的な行爲ではなく、身内の者ですら「樂視」する習俗化・慣習化したものであつたこと、またこれを裁く州縣官も圖賴として處罰せず、埋葬銀を被害者から追徴して加害者に支給した、すなわち圖賴を積極的に處罰しようとはしなかつたこと等、極めて興味深い議論を展開している。

このように地域で習俗化・慣習化した行爲は、國家權力に持ち込まれた場合、事實關係・犯罪性の有無が裁判で争われたであろうが、それはあくまで一部にすぎず、事の性格上實際には地域（宗族結合を紐帶とする共同体）内部で處理されてしまつた事例も多々存在したであらう。具體的な處理方法としては圖賴被害者が加害者の要求に従つて金錢等を支給し、死それ自體は單なる自殺として届け出られる等、様々な事態を想定できる。ところでこのような「私和」が行われる時、問題となるのは圖賴をめぐる心

性である。著者はすでに圖賴を選択する人々の死生觀・他界觀にまで踏み込んで考察している。ただし著者自身も認識するように史料的に困難な作業であり、著者の示した文言——死別與生離——はあまりに抽象的な表現であるために、残念ながら未だ十分に納得のいく説明がなされていないように思われる（四三四―四三五、四七八―四八二頁）。

また一方で圖賴選擇者のみならず、圖賴の被害者（抗租をめぐる圖賴ではおもに地主をさす）の心性の検討も不可欠となろう。著者もかかる點に觸れており、たとえば王世懋「閩部疏」の記事を引用しながら「恨みの對象となつた家の方も圖賴を行つた側に金銭を支拂ひ、裁判沙汰に發展するかもしれない」「事」をまるく收めようとする」（五〇一頁、傍點は評者による）と述べている。この見解の根據となつた原文は「怨家富而畏事、厚償之去」であるが、ここに見える「畏事」は本當に（事が大きくなつて）裁判沙汰になるのを畏れたとの意であろうか。斷定するのはなかなか難しいようである。しかしこの部分を如何に譯すかは圖賴の被害者の心性とも關わつていて重要である。評者にも全く回答は準備できていないが、著者が掲げる現實的な問題以外に擧げるとすれば、それは怨み・崇りの類であらう。つまり被害者が畏れた「事」とは文脈からして自分に怨みをもつ者が斷腸草を食べ、今まさに死を迎えようとしている事實である。そうした怨みは被害者本人のみならず、當然に子孫にまでも重大な影響を及ぼすであらうから、一旦發生してしまえば極めて慎重な處理が求められたに相違ない。たとえ一介の佃戸の死であつても、一種の怨み・崇りによる一族の衰退・没落は是が非でも避けねばなるまい。こ

した觀念の存在を實證する手だては全く無いが、裁判沙汰になるというすぐれて現實的な問題の外に、手厚く埋葬せねば死者の怨み・崇りを鎮められないという脅迫觀念にも似た意識に突き動かされる、そうした行動パターンが當時の人々にはあつたのではないだろうか。またかかる觀念の存在を前提として始めて圖賴めぐつて「私和」する被害者と加害者の心性を理解できるのではなからうか。

最後に細かい點であるが、著者が埋葬銀と考えた「插花例銀」（四七五頁）について。この案件では圖賴被害者の吳在升が事件を契機に加害者鄭邦振への土地の返還とそれに伴う代價の返済を求めている。しかし赤貧の鄭邦振には拂ひ戻す現金も無い。そこで吳在升に命じられたのが插花例銀十兩の支拂いであつた。著者はこれを鄭邦振への埋葬銀と解釋するが、はたしてそうであらうか。この十兩は鄭邦振の父國社が土地の一部を贖回した際に吳在升に支拂つた十兩と同額である。この事と文脈からして吳在升にその十兩を出させることで、むしろ全ての土地を吳在升の所有とし、鄭邦振との關係を斷絶させようとした處置だったのでないだろうか。「例銀」の語に若干の疑問が残らぬわけではないが、「插花」は土地の所有權等が複雑に入り組んでいる狀況を示す表現と考えられるから、埋葬銀でない可能性は高いと思われる。

以上、評者の淺薄な興味關心から若干の疑問點を提示してきたが、門外漢ゆえの的外れな議論を行つた部分も少なくないと思われる。著者の御海容を請う次第である。また上述のとおり、本書が明清時代史研究に投げかけた問いは極めて大きい。それを正面から受けとめて紹介・論評できなかった評者の非力を併せてお詫

びしなければならぬ。今後著者の研究はどのような方向に進んでいくであろうか。本書から多大な知的興奮を與えられた評者ならずとも明清史研究者の注目するところであるのは間違いない。

二〇〇二年二月 北海道 北海道大學圖書刊行會
A五判 五四一頁 一〇〇〇〇圓